

## 訓讀「觀光日本」

（漢文で讀む吉利支丹列傳）

石\* 井 望

## The Bright Light of Japan

— Biographies of Japanese Christians in classical Chinese —

ISHII Nozomu

## 【前言】

近代に於ける漢文の文體變遷を考へるに、鴉片戦争と日清戦争とが大きな區切りをなしてゐる。鴉片戦争後の時期は、宣教師を中心とする人々が洋文を次々に漢譯し漢土に新知識を注入せうとしたので、多くの洋學漢文が生まれた。分野は理科・工科・法科・地理・歴史・宗教などに亙る。その際に共譯者として有名無名の漢人が力を發揮し、一定水準の文章を新學諸科に出現させたので、讀者は原書の洋文脈を念頭に置かず獨立した漢文として讀んで阻碍ない場合が多い。日清戦争まで約五十年間、この時期の漢文は新舊文明の精粹を一爐に煉つて稀有の奇觀を成したと言ふべきだらう。

日清戦争後は、梁啓超らが和製漢語を多用し一世を風靡した。以來、世の文體はとみに易きに就き、なま分かりの新觀念を雜然

と織り混せて文章が濫造されるやうになった。たとへば和製英語を本來の英語の中で用ゐれば美しくないのは當り前だが、和製漢語も同じ道理である。量が少ないうちはこれを新奇と喜ぶこともできたが、濫用の致す所、二千年間ほぼ保たれて來た漢文の純粹性は一朝にして潰え去つた。文明開化の急需要の前に和製漢語といふ便法が存在したことが不幸な組み合わせだったと言ふべきだらうか。

この兩時期で日本に關する純粹漢文を求めるならば、日清戦後にはほとんど見つからないこと勿論である。日清戦前は文は純粹だが西學を主としてをり、日本の事物思想を論じたものは多くない。數少ない代表作として王韜の扶桑游記（西曆一八七九年成書）・黃遵憲の日本雜事詩（西曆一八七九年成書）・日本國志（西曆一八八七年成書）がある。この三書にはすでに和製漢語が出現するが、それは日本獨特の言ひ方として距離を置いて叙述したも

ので、文體を壊すに至つてゐない。

これら早期の名著より更に早いのが、西暦一八七一（明治四）年に成る「觀光日本」である。内容は日本の天主教徒傳だが、和製漢語を全く含まないので、読みながら時として西域か南洋の物語かと疑ふ程である。しかし文體は所謂古文の系統ではないので、あまり味はひ深くない。四字づつ平板に流れてゆく部分は佛經體にも近い印象を與へる。また簡略な叙述のためか人物像が平板且つ劃一的になる憾みがある。佳作ではないが平易なので初級漢文の教材としては面白い。これまで世に知られてゐないので、本稿でまづ序文および第一則を紹介する次第である。すべて訓讀を附したが、そのわけは三つある。漢學專攻以外の人の利用に供するため、初級教材として使用するため、そして日本獨特の訓讀文化を守つてゆくためである。

### 【解説】

「觀光日本」二卷、日本の天主教徒傳を卷上に三十五則、卷下に三十三則、計六十八則收める。西暦一八七一年「上海慈母堂」刊行、前に序あり。長崎縣立圖書館のほか上海圖書館・澳門大學國際圖書館に藏する。

柴田篤「明清期天主教漢籍流入の一形態」によれば、長崎大浦天主堂敷地内の舊羅甸學校には維新前後にプチジャン神父が漢土から移入したと思はれる天主教漢籍が數多く藏せられてゐた。その大半は上海徐家匯の慈母堂で刊行されたもので、現在は九州大學、長崎純心大學、長崎大司教館（大浦天主堂敷地内）、福岡サン・スルピス大神學院に分藏されてゐるといふ。うち長崎縣立圖書館藏の諸本は昭和十三年に館藏に歸したものとのこと。いま同館

所藏の「觀光日本」を見ると昭和十三年受け入れ印が押されてゐるから、これも羅甸學校かその關係者の舊藏と見て間違ひ無からう。ただし柴田論文に附する「長崎大浦天主堂附屬羅甸學校舊藏明清期天主教漢籍目錄稿」には「觀光日本」を載せてゐない。

プチジャン神父はフランス人で、大浦天主堂を創建し、隠れキリシタンの歴史的復出に立ち會ひ、またキリシタン舊傳の和語を用ゐて多くの教籍を編輯刊行したことで知られる。片岡彌吉「長崎のキリシタン」頁一一五によればプチジャンは慶應四（西暦一八六八）年に長崎の神學生十名を上海から香港經由でピナンに避難させ、明治三（西暦一八七〇）年にも石版工を含む計十三名を上海に逗留させた後香港に避難させた。禁教政策を逃れるためである。これを羅甸學校に於ける徐家匯版教籍の舊藏狀況に考へ合はせると、プチジャンらは徐家匯のイエズス會（後述）と常に聯絡を保つてゐたのだと考へられる。柴田論文所載諸本の刊行年のうち最後のものは西暦一八八四年で、丁度プチジャン逝去の年だといふ。柴田氏はプチジャンとその學生たちが教育・學習の上で漢譯教典を參考にしてゐた筈だと述べるが妥論であらう。

柴田氏の擧げる諸藏館のうち、現時點で九大・純心には「觀光日本」を藏せず、大司教館の藏書は非公開である。スルピスにはまだ問ひ合はせてゐない。管見の及ぶ所では他に觀光日本の藏館は無いやうである。恐らく國內では孤本であらう。

書誌に於ては、徐宗澤「明清間耶穌會士譯著提要」卷十に載せる徐匯書樓藏目の史地外國類に「觀光日本稿」がある。この稿本の行方は現在では分からない。近年製作のCDR「徐家匯藏書樓明清天主教文獻」十數枚の目錄を見ても「觀光日本稿」は這入つてゐないから、恐らく失なはれたのであらう。

上海徐家匯の慈母堂は天主教（カトリック）の教籍を數多く刊

行してをり、上述の羅甸學校舊藏以外にも日本各地に慈母堂版本が藏せられてゐる。徐家匯の天主教組織はフランスのイエズス會が營んだもので、「江南傳教史」上下兩冊にその沿革が述べられてゐる。慈母堂は徐家匯の土山灣に開かれた孤兒院であり、もと育嬰堂と呼ばれ、別名慈母堂<sup>(2)</sup>、のちには土山灣孤兒院と呼ばれた。育嬰堂には印刷房が附設され、民國年間まで教籍出版を續けた。「江南傳教史」<sup>(3)</sup>、「上海天主教出版概況」、「土山灣印書館瑣記」、「我所見聞的馬相伯先生」<sup>(4)</sup>などでは「孤兒院の印書館」としか呼んでゐないが、「慈母堂」と題する版本は「土山灣印書館」と題する版本と同一の印刷所で印行されたものである。

觀光日本のとびらの背面には、

「極西耶蘇會士方濟・夏顯德譯、雲間同會士禮門・沈則恭纂訂、瀛洲司鐸小艇・蔣超凡、雲間同會士問漁・李浩然同閱、同會主教郎亞弟盎准。」

と題する。原本では司鐸や耶蘇會士等と横ならびに「主教郎」とあり、「郎」と「亞弟盎」との間は空二格である。明らかに主教郎が一つの職稱として扱はれてゐる。しかし「江南傳教史」をひもとけば分かるが、これは漢名「郎懷仁」といふ江南教區の主教であり、同書の四分の一は「郎懷仁主教時期」の目を立ててゐる。亞弟盎とは、郎氏の原名「Adrien Langillat」の「Adrien」が寫されたものであり、「准」とはもちろん主教として出版を允准したのである。當時の各地の天主堂基石記にも亞弟盎郎の署名がある<sup>(5)</sup>。イエズス會直營の版元よりしてこのやうな間違ひを犯すのは、慈母堂で當時收養してゐた孤兒たちを印刷所の刻工として使用してゐたためかと思はれる。恐らく彼ら童工にとっては江南主教など雲の上の人であり、郎亞弟盎といふ姓名だとは知らずに彫刻したのであらう。そして點檢の目をぐりぬけて發行に至ったわけで

ある。そのやうな間違ひがあるとは言へ、全體は決して粗末な印刷ではない。

譯者の方濟・夏顯德の原名は「Francois Giaguinto」(フランソワ・ジャキント)<sup>(6)</sup>である。「Francois」が方濟に当たり、「Giaguinto」が夏顯德に當たる。

校閲者の李浩然・問漁氏は殊に著名で、方豪「中國天主教史人物傳」などに傳がある<sup>(7)</sup>。一般に問漁といふあざなで知られる。名門復旦大學の創立者・馬相伯とは共に徐匯で學んだ熟悉の間柄であり、共に近代の西學に足跡を残した。李問漁が編輯した雜誌「益聞錄」<sup>(8)</sup>には或は觀光日本を含む舊刻書の廣告くらゐ出てゐるかも知れないが、稀觀のため今回は入手できなかった。

雲間の沈則恭は馬相伯より二年先輩の徐家匯イエズス會士で、同治九(西曆一八七〇)年に馬相伯とともに司鐸(日本譯司祭)となった人物である<sup>(9)</sup>。「纂訂」の仕事は恐らく文章の作成であらう。雲間とは上海に近い松江のことである。

瀛洲の蔣超凡は、本書の他に同じ慈母堂版の「集說詮真」の校者でもある。瀛洲は海中の仙山であつて東海の島々は往々これに擬せられる。上海に近い崇明島も古くから瀛洲に擬せられる島の一つである。崇明島には徐光啓の時に天主教が傳へられたから、蔣超凡は恐らく崇明の祖傳の教徒だらう。

彼らが觀光日本を刊行する前、慶應四(西曆一八六八)年及び明治三(西曆一八七〇)年に長崎の神學生たちが秘密裏に上海に來たことは上述の通りである。上海で長崎の天主教徒が身を寄せた先が徐家匯の天主教團だった可能性は高い。或はそれが觀光日本を譯編する動機となったのかも知れない。今後「徐匯紀略」「益聞錄」「聖心報」などの稀觀資料を見れば何かの記録が見つかるかも知れない。



觀光日本といふ書名は、訓讀すれば「光を日本に觀る」である。觀光とは繁榮を觀ること、「觀光上國」（光を上國に觀る、進んだ都市の繁榮を觀る）といふ常用句はほとんど成語に近く、「觀光」二字だけでも「みやこに上る」の意味に使ふ。明代以來、漢土に僑居した宣教師も往々「觀光中國」（世界の中心にのぼる）と謙稱した。これを書名に用ゐたのは、日本を進んだ國と認めるがゆゑである。このやうな思想の漢文は王韜・黃遵憲以前では稀有のものであつて、譯者・夏顯徳の考へで命名したものと思はれる。歐洲人にとっては東アジアに於ける華夷の別などどうでも良いことであり、夙に安土桃山時代の宣教師たちが傳へた日本の姿は少なくとも一文明國である。フランス人夏顯徳にとつても日本を漢土より低く扱ふ理由は無かつたらう。

夏顯徳が譯に用ゐた粉本は記載されてゐないが、搜した結果クラッセ (Crasset) の「Histoire de l'église du Japon」（日本教會史）だと分かつた。これを摘譯改編したのが觀光日本である。西暦一六八九年パリ初版だが、私は西暦一七一五年の再版本を閲覽できたのでこれを用ゐる。著者クラッセ（一六一八—一六九二）はフランス人、イエズス會士である。この書には明治十一（西暦一八七八）年の和譯があり、「日本西教史」と題する。幸田成友「日本西教史について」によれば、大浦の神學校の漢學教師・山本松次郎が翻譯に關はつたことである。漢學教師だから恐らく文章の手入れをしたのだらう。大浦の神學校は上述の羅甸學校だらう。譯業は明治十年から十一年の間に進められたが、その前の數年間は教禁が解かれたばかりで、プチジャン神父が横濱・大阪・長崎の教會を往き來して忙しかつた頃である。

觀光日本が載せる内容には大村純忠・大友宗麟・高山右近などの事跡、天正十五（西暦一五八七）年のパテレン放逐令、慶長十

九（西暦一六一四）年の大放逐などがあるが、寛永十五（西暦一六三八）年の島原の亂及び慶長二（西暦一五九七）年の二十六聖人殉教については記さない。遅い年代の内容はほぼ西暦一六三〇年で盡きてゐる。

島原の亂については、クラッセも末尾で簡単に記すのみで（和譯頁三七七）、西暦一六三〇年頃から後の記事は概ね簡略である。日本の宣教師組織が禁教によりほぼ崩潰し、消息も少なくなつたためだらう。西暦一六四二年から後については情報源がほとんど無いと書中にも書かれてゐる。また島原の亂は日本國內では大事件であつたが、そこに宣教師は加はつてをらず、歐洲であまり關心を引かなかつたのもむべなることである。觀光日本に島原の亂が書かれないのも當然だらう。

これに對し二十六聖人殉教は歐洲でよく知られた事件でありクラッセも大事件として記すにもかかわらず、觀光日本にこれを載せないのは不可解である。その理由を推測するならば、フランチェスコ會士を中心とするこの事件に對しイエズス會として何らかの思惑が有つたためだらう。姉崎正治「切支丹傳道の興廢」及び松田毅一「近世初期日本關係南蠻史料の研究」<sup>(1)</sup>などによれば、事件の責任の所在に關して兩會は激しく對立してゐたといふ。そしてパジェス「日本廿六聖人殉教記」第二七五頁の松崎實注によれば、西暦一八六一年にフランチェスコ會士ら二十三人は列聖されたが、イエズス會士三人は西暦一八六二年になつてから列聖された。その原因は兩會の書類提出の先後によるものだといふ。しかし殉教圖繪も往々にして二十三人だけのものと三人だけのものとが有るといふから（パジェス同書圖繪參照）、やはり單なる書類の問題ではなからう。二十六聖人に關する書籍は現在日本で數多く出てゐるが、管見の及ぶ限りでは列聖前後のウラ事情を述べたものは無

い。當時の歐文原資料まで調べるのは私の手に負えないのでこの問題は追究しないが、しかし列聖から十年、觀光日本の譯された頃にはまだイエズス會として何らかの複雑な考へ方があり、それが譯中不採用といふ形であられたものと思はれる。

いづれにせよ幕末の開國以來、歐洲で日本及び吉利支丹遺史に對する關心が高まり、それが二十六殉教者列聖の機運をもたらし、慶應元年（西曆一八六五）には浦上の隠れ吉利支丹の復出があり、またパジェスの名著「日本切支丹宗門史」も西曆一八六九年にパリで刊行される（同書凡例）など、一連の趨勢の中で「觀光日本」が書かれたわけである。當時パジェスの著は刊行されたばかりであり、上海では教會の通信や新聞などでその消息を得てゐたかも知れないが、まだ原書を手してはゐなかつたらう。それ以前に最も知られてゐたクラッセの著を教會の書庫から取り出して摘譯したと考へれば自然なことである。

わが國の國立情報學研究所の藏書目録「webcat」をネット上で檢索すると、クラッセのこの著にはドイツ語・英語・イタリア語・ポルトガル語の譯本が有り、すべて西曆千七百年代半ばまでの刊行である。一時はかなり賣れた書物だったがその後絶版になったのだらう。ピリオン「鮮血遺書」自序（明治二十年）によれば、明治の初めフランス全權公使・鮫島尚信は駐地でクラッセ原書の舊刊に偶然出逢ひ、その稀少なるに驚き、日本で翻譯させて「日本西教史」として發行したといふ。恐らく舊書舗で購入したのであらう。確かに新版が無いといふ點では稀少だが、一度はよく賣れた書だからその舊版に舊書舗で出逢ふのは難しくなかつた筈である。杉井六郎『日本宗教自由論』、『日本西教史』とその背景」（頁一九五）によれば、鮫島尚信は明治三年（西曆一八六九年）フランスに差遣され、同六年（西曆一八七三年）特命フランス全權公

使に任ぜられてゐる。これは慶應三年（西曆一八六七）パリ萬國博覽會に日本が參加した後、所謂ジャポニズムが起ころうとしてゐた頃だから、パリ舊書舗のクラッセの書は奥に仕舞はれたままではなかつたと想像される。出逢ふべくして出逢つた書であらう。和譯「日本西教史」も大正年間までは版を重ね各地圖書館に多く藏するが、現在ではあまり注目されない書物である。もともと研究上の第一次資料ではなく誤りも多いので、殉教史の考證が盛んになってからは埋もれてしまつたのである。しかしその譯筆は甚だ酣暢である。古今東西共通の現象として、通俗的價値のある書物は學問的價値が無いために減んで行き、後世に名著とされるのは難しい書物ばかりといふことになる。

最後に殉教史について一言。日本のキリシタンが前に仆れ後に繼いで殉教してゆく姿は世界のキリスト教史にも書かれてゐるが、そこには淨土教やオウム眞理教にも通じる日本人の一種の傾向が見える。先の大戦でも特攻隊は國家のために血を流し、關係者は失策の責任を今なほ問はれ續けてゐる。キリシタンは極西のキリスト神話のために血を流したのでから、さう導いた教皇も少しは申し譯ないと思ふべきだらう。しかし今となつては遠い歴史であり、純潔なる信仰の物語として讀むことができる。

### 【凡例】

私はフランス文に通じないので、本稿では和譯「日本西教史」を主に參考とし、時に佛和辭典を引きつつクラッセ原本を對照した。キリシタン史料としては觀光日本に大きな價値は無いし、キリシタン研究も私の手に負へるものではない。本稿の主目的は漢文の日本人傳を教材・讀み物として利用することである。



書中に用ゐられる雅各伯（ヤコブ）・若望（ジョヴァン）など教徒の聖名の宛て字は明代以來傳統的に宣教師たちが用ゐたもので、クラッセの原書がフランス語だからと言ってフランス音を寫してゐるわけではない。この種の傳統的宛て字は概ね中州韻を以てイタリヤカラテンの音形らしきものを寫してゐるが、本稿の領域外のことなのでここでは論じない。

書中の日本音の宛て字も觀光日本の發行地・上海の方音ではなくて、やはり中州韻のやうである。中州韻といふのは南北折衷的性格のものであつて北方の土音ではない。その體系は崑曲の韻書及び讀法に最もよく傳へられてゐるので、本稿では假に崑曲字音を擧げて參考に供する。これは私自身がこれまで長老の口傳に學んだもので、明代の中州全韻・度曲須知等の書に合致してゐる。崑曲字音體系は現在私が整理中であり、本稿の領域外のことなのでこれも詳論しない。ただ注意點は、崑曲は呉語を基礎とした中州韻なので濁類字が單獨で讀まれる時は無聲子音の後ろに濁氣「ㄗ」を伴ふが、連讀するとこれが有聲となる。そのため一語の第一字の濁類字は無聲に「ㄗ」を加へて標音し、第二字以下は有聲子音を以て標した。

キリスト教の教理に關する事柄については出来るだけ文語漢文で書かれたカトリック入門書を引用してこれを釋した。ただし手元にあるものが限られてゐるので、嚴選した書を用ゐたわけではない。今回引用したのは「聖教要經」「教要序論」「天神會課」「取譬訓蒙」の四種である。また「觀光日本」以前にはカトリック譯の新舊約聖書が無いので、代りに同治三年の美華書館「新約全書」（新教譯）を引用する。これは中々の佳譯である。ゆまに書房が近年刊行したモリソン漢譯は最も早く、創始の功は大きいものの、殘念ながら怪譯といふべきもので、讀むに堪へない。また美華書

館の聖書には版本多種あるやうで、私は同治二年版も閱覽したが、これは同治三年版とは別の譯であり、惡文なので今は用ゐない。

本稿はまづ序文と第一則とを訓讀し注釋した。口語譯は意味の確認のために附したもので、通讀のためではない。重點は訓讀に置くので、訓讀法の基本的なものについても少々釋した。

## 【序】

孟子曰：

「水搏而躍之，可使過額；激而行之，可使在山。」

水性趨下，其所以能上者，係搏激耳。自元祖逆命，人性就下，爲惡如奔，爲善如登。欲使之上達，非搏激不爲功。然誰搏之而誰激之哉。前人懿行是其一。大聖奧斯定暨聖依納爵皆龜鑒。聖人行實，振自新之意，基作聖之功。豈搏激之效驗于古而不驗于今耶。爰譯日本國教友傳二卷，將搏激華友，共登聖岸。雖然，聖人行實充棟矣。曷區區于日本國教友傳哉。曰：是有說。人習厚邇薄遠。日本國于華夏爲最邇，撫厥本源，尤屬一脈。則其搏激之視他聖行實爲尤神。傳中詳載日本國教友何如奉教，暨其守規避罪，苦身默想，愛主致命，種種諸功。余願閱是書者奉爲楷模，釋書時將猛然自醒曰：

「彼能是，而我乃不能是。」

## 【訓讀文】

孟子曰く：

「水、搏ちてこれを躍らしめば、額を過ぎしむべし。激せしめてこれを行かしめば、山に在らしむべし」と。

水の性は下に趨く。其のよく上がる所以の者は、搏激に係るのみ。

元祖、命に逆らひてより、人性下に就き、惡を爲すこと奔るが如く、善を爲すこと登るが如し。これをして上達せしめんと欲せば、搏激に非ずば功を爲さず。然れども誰れかこれを搏ちて誰かこれを激せしめんや。前人の懿行は是れ其の一なり。大聖アウグスティヌス暨び聖イグナチオは皆な龜鑒なり。聖人の行實、自新の意を振るはしめ、作聖の功に基たり。豈に搏激の效、古へに驗はれて而して今に驗はれざるか。爰に日本國の教友の傳二卷を譯し、將に華友を搏激して共に聖岸に登らしめんとす。然りと雖も、聖人の行實棟に充てり。曷ぞ日本國の教友傳に區々たるか。曰く、是れ説有り。人、邇きに厚くして遠きに薄くするに習ふ。日本國は華夏において最も邇しと爲す。厥の本源を撫するに、尤も一脈に屬す。則ち其の搏激の他聖の行實にくらぶるや尤も神なりと爲す。傳中、日本國の教友何如に教へを奉じ、暨び其の規を守り罪を避け、身を苦しめ黙想し、主を愛しみ命を致す、種々の諸功を詳載す。余願はくは是の書を閲する者、奉じて楷模と爲し、書を釋つる時、將に猛然として自醒して、

「彼れ是れを能くす、而うして我れ乃ち是れを能くせざる」と曰はんことを。

# 「口語譯」

孟子曰く：

「水は叩いて跳ね上げると額の高さを過ぎるやうにできる。障礙でせかして進ませると、山に上げることできる」

と。水の性質は下に向かふもので、それが上がり得る理由は、叩いたり波立てたりするがゆゑだけだ。始祖アダムが天命に逆らつてから、人の性質も低きに向かひ、惡を爲すには狂奔の勢ひで、善を爲すのは上に登るやうに困難である。上に行かせるには、叩

き波立てるのでもなければ効果が無い。しかし誰が叩き、誰が波立てるのだらうか。先人の良き行なひがその一つである。大聖人アウグスティヌスと聖人イグナチオとは、ともに手本である。聖人の事跡により、懺悔の心が勇氣づけられ、聖人になる修練に基礎が出来る。まさか叩き波立てる効果が、古人については確かでありながら今の人について確かでないものだらうか。そこで日本の教徒傳二卷を翻譯し、中華の教徒に刺激を與へて共に聖人の境地に到達せうとするのである。しかし聖人の事跡は建物に書籍が満ちるほど多いのに、なぜ日本の教徒傳にこだはるのか。答へて曰く、これについては言ふべき道理がある。人といふのは近くに關心を持ち、遠くに無關心である。日本は中華にとつて最も近い。その出自を尋ねれば、殊に同系統に分類できる。だからその刺激は他の聖人の事跡に比して殊に眞に逼る。書中、日本の教徒がどのやうに教へを受け入れたか、及び紀律を守り、罪を犯さぬやうにし、自分の身體を苦しめ、黙想し、天主を愛しみ、命を捨てた等の種々の精進を詳しく載せる。この本を読む人がこれを手本にし、本を下に置いた時に俄かに己れに氣づき、「彼らにはこれが出る。ところが我らにこれが出来ないのか」と言ふであらうことを私は願ふ。

# 「釋詞」

〔搏激〕 孟子（告子上）の言葉の反用。孟子の原意は「搏と激とにより人に惡を行なはせることが出来るが、搏激さへしなければ實は性善である」といふもの。もともと一般人は孟子などほんやり讀んでゐるだけなので、このやうな反用に違和感はないのだらう。

〔水性趨下〕〔人性就下〕 孟子の原意は「水性就下、人性趨上」で



ある。孟子の言ふ人性の上下は水性と逆方向だが、それは告子の「水性に東西なし」<sup>(13)</sup>といふ譬へに強ひて反論したからである。元々斷章取義され易い譬へである。

〔係搏激耳〕 係は「かかる」と読み下すが、理解の仕方は二つある。甲、「く」によつて決まる。乙、「く」である。乙は後起の用法で、恐らく甲の意味が曖昧になつて發生したものだらう。今この句では乙に理解することも不可能ではないが、序文そのものが一應は古文に擬してゐるので甲を取る。

〔元祖逆命〕 人類の元祖アダムが禁斷の果實を食した話。取譬訓蒙の卷上「教要總説」に曰く：「元祖、命に違ひて菓を食らひ、天主に叛逆す。天主怒り、地堂より逐出す<sup>(14)</sup>」と。

〔奧斯定 アウグスティヌス〕 西暦三五四—四三〇 キリスト教にもとづく世界觀を確立した古代末期最大の思想家である（山川教科書「世界の歴史」）。

〔依納爵 イグナチオ〕 西暦一四九一—一五五六 イエズス會の創始者（山川同書）。

〔自新〕 自分を新しくする。反省する。たとへば新約全書「希伯來（ヘブル）人に達する書」第六章第六節に曰く：「其のよく悔改自新せざること、猶ほ復た上帝の子を十字架に釘づけて顯らかにこれを辱しむるがごとし<sup>(15)</sup>」。

〔作聖之功〕 聖人になる修練。「功」は努力・力量・成果などの意味に用ゐる。易經の蒙卦の彖傳に曰く：「蒙にして以て養ひ正すは聖功なり<sup>(16)</sup>」と。朱子語類の卷七十にこれを釋して曰く：「蒙昧の時に先づ養教して正當にし了れば、かの開發の時に到つて便はち作聖の功有り<sup>(17)</sup>」と。このやうに傳統的な言ひ方により、一般讀者は母土の儒・佛・道と西洋修道家との親近性を覺えつつ讀んだであらう。

〔登聖岸〕 佛教語「彼岸に至る」の借用。聖人の境地に到達すること。

〔爲最邁〕〔爲尤神〕 「爲」は「く」である」の意味。読み下しては「くとなす」。

〔撫厥本源〕 「撫」は見かけない用法だが、「按」「考」と同じやうに使はれてゐる。

〔尤屬一脈〕 史記に載せる徐福東渡の遺聞を日本と結び着けたもの。徐福と明言しないのは、それだけよく知られてゐたからである。「觀光日本」に近い時代では道光年間（幕末）の魏源「海國圖志」卷十七「日本島」に曰く：「華人の倭に入るは徐福より始まる。其の遺民、年久しくして繁衍し、遂に通國に散布す<sup>(18)</sup>」と。

〔何如〕 「如何」に同じ。動詞の前に置くことはほとんど無いので、これは文語としては非正格である。

〔致命〕 生命を捨てること。明治大正の日本の殉教記類にも「致命傳」と題するものがあるが、もちろんそれも漢譯の教籍から取つたものである。「致」の原義は「至」の使役であり、齎らすこと、ひいては獻げること。古くは易の困卦の象傳に「命を致し志を遂ぐ<sup>(19)</sup>」といふ言葉がある。

〔日本國〕 いちいち「國」の字を添へるのはくどいやうだが、地志・小説の類では遠夷を某國某國と呼ぶ習はしであつた。すなはち暹羅國・爪哇國の類ひで、化外の異邦人といふイメージである。それに慣れた讀者を想定してゐるので、いちいち日本國とするのである。イギリスやポルトガルなども舊時は英吉利國・葡萄牙國などと呼ばれてゐた。



觀光日本上卷

【兄妹齊名】

惟來辣，耶蘇會司鐸也。初至撒蓋城傳教，著短白衣，手執苦像，延街講道。城人見此新奇，聞此新道，蜂擁而來。講畢後，有一人來前。自言願意進教，并請司鐸到家。鐸至其家，款留甚厚。其人信從聖教，而其父母子女亦皆領洗也。父名撒爵，母名瑪利亞，子名味增爵，女名莫尼加。皆欣勤守誠，避罪立功，惟味增爵與莫尼加更有進焉。蓋味增爵十有四歲，修德行善，比衆不同。勤行告解，頻領聖體。從此聖愛日增，神修日密。因知致命者，主所特愛，故常苦身克己，求主賜此宏恩。

一日，鐸問之曰：

「爾愛耶蘇何如。」

味增爵曰：

「愛之摯也。」

鐸曰：

「愛不于言見。當于行見。爾將何爲，以徵爾摯愛之情乎。」

味增爵曰：

「致命也。」

鐸曰：

「吾主耶蘇，爲救爾靈，受萬般苦辱。爾能受其萬一乎。」

味增爵曰：

「雖受萬苦，我亦不辭。」

鐸曰：

「設有一外教人，問爾曰：『或背耶蘇，或捐生命』，爾將何辭以應之。」

味增爵曰：

「我將曰：『我爲教友，至死不變。雖粉骨碎身，亦我所願。』」則按其言行，而味增爵之生平可想矣。至于其妹，師兄聖表，步厥後塵。愛主苦身，不遺餘力。莫尼加知父母已爲出字，殊爲憂鬱，徑赴鐸前，泣陳己意曰：

「婢蒙領洗宏恩，已經三載。而守貞之意，常往來于心而不能去。無如父母未經面諭，早爲許字。本違教規，兼非婢願。故懇神父轉祈家父，免婢出嫁。雖受萬苦，亦所甘心。」

鐸聆其言，即曰：

「爾志善哉。予甚嘉之。但守貞一事，關係非輕。其貴固不可言，而其險亦難屈指。且此事日本所未聞而未有者也。若爾行此，爾之親戚鄉鄰，必以爲創見創聞，定來阻止。此事誠大事也。此事誠難事也。爾宜三覆思之，不可鹵莽。」

莫尼加答曰：

「敬聆聖訓，銘佩于心。但知天主無有莫能行之行。主賜吾此志，主必將賜吾成之也。婢今專恃主能，誠求主佑，勤修神業，專務神工。每主日大齋三次，滴水不沾，每日擇定數時，默思主難。庶幾事成有日，望不終虛也。祈主俯聽予禱，垂允我求。」

鐸聽其言，知有主意，遂以女志諭父。父本熱心教友，唯唯從命，無有異言。莫尼加聞之樂甚，斷髮獻身，一世貞修，終生行善。

（日本西教史上冊第二六七及三三七頁、

クラッセ上冊第二二九及二七一頁）

【訓讀文】兄妹、名を齊しくす。

ヴィレーラは、耶蘇會の司鐸なり。初めてサカヒ城に至りて教へを傳へしとき、短白の衣を着け、手に苦像を執り、街にそひて道を講ず。城の人、此の新奇を見、此の新道を聞き、蜂擁して來

たる。請じ畢りて後、一人有りて前に來たる。みづから言はく、教へに進まんと願意すと。並びに司鐸を請ひて家に到らしむ。鐸、其の家に至るや、款留すること甚だ厚し。其の人、聖教に信從して、而うして其の父母子女も亦た皆な洗を領するなり。父はサンツイオと名のり、母はマリヤと名のり、子はヴィツェンツイオと名のり、むすめはモニカと名のり。皆な欣勤に誠を守り、罪を避けて功を立つるに、ただヴィツェンツイオとモニカとのみ更に進む有り。蓋しヴィツェンツイオは十有四歳にて、徳を修め善を行なひ、衆に比して同じからず。勤めて告解を行なひ、頻りに聖體を領す。此れより聖愛日に増し、神修日に密なり。命を致すは主の特に愛する所なりと知るに因つて、故に常に身を苦しめ己に克ち、主の此の宏恩を賜はんことを求む。

一日、鐸これに問ひて曰く「爾ち耶蘇を愛すること何如ぞや」と。ヴィツェンツイオ曰く「これを愛すること摯なり」と。鐸曰く「愛、言に于いては見えず。まさに行なひに于いて見ゆべし。爾ちまさに何を爲して以て爾ちが摯愛の情を徹するか」と。ヴィツェンツイオ曰く「命を致すなり」と。鐸曰く「吾が主耶蘇、爾ちが靈を救はんが爲に、萬般の苦辱を受く。爾ちよくその萬一を受くるか」と。ヴィツェンツイオ曰く「萬苦を受くと雖も、我れ亦た辭せず」と。鐸曰く「設し一の外教の人有りて、爾ちに問ひて『或は耶蘇に背くか、或は生命を捐つるか』と曰はば、爾まさに何の辭もて以てこれに應ずるか」と。ヴィツェンツイオ曰く「我れまさに『我れは教友たり、死に至るまで變はらず、骨を粉にし身を碎くと雖も、亦た我が願ふ所なり』と曰はん」と。則ちその言行を按じてヴィツェンツイオの生平想ふ可し。

其の妹に至つては、兄が聖表を師とし、厥の後塵を歩む。主を愛し身を苦しむること、餘力を遺さず。モニカ、父母已に出字を

爲すと知り、殊に憂鬱と爲す。徑ちに鐸が前に赴き、泣いて己が意を陳べて曰く「婢、洗を領するの宏恩を蒙つて、已に三載を経たり。而して貞を守るの意、常に心に往來して去ること能はず。いかんする無し、父母未だ面諭を経ずして早くも許字を爲せり。もと教規に違ひ、兼ねて婢が願ひに非ず。故に懇ふ、神父轉じて

家父にもとめ、婢の出嫁を免れしめよ。萬苦を受くと雖も、亦た心に甘しとする所なり」と。鐸、其の言を聆き、即ち曰く「爾ちが志、善き哉。予、甚だこれを嘉みす。但し貞を守るの一事、關係輕きに非ず。其の貴きは固より言ふ可からざれど、而も其の險しきも亦た指を屈し難し。且つ此の事は日本に未だ聞かずして未だ有らざる所の者なり。若し爾ち此を行なはば、爾ちが親戚郷鄰必ず以て創見創聞と爲し、定めて來たりて阻止せん。此の事、誠に大事なり。此の事、誠に難事なり。爾ち宜しく三たび覆してこれを思ふべし、鹵莽なる可からず」と。モニカ答へて曰く「つつしんで聖訓を聆き、心に銘佩す。但し知る、天主は行なふ能ふ莫きの行なひ有る無しと。主、吾れに此の志を賜ふは、主必ずまさに吾のこれを成すを賜はんとするなり。婢、今専ら主が能を待み、誠もて主が佑けを求め、勤めて神業を修め、専ら神工に務む。主日ごとに大いに齋すること三次にして、滴水にも沾はず、毎日數時を擇定し、黙して主が難を思ふ。庶幾はくは事の成るに日有り、望み終ひに虚しからざらんことを。主にもとむ、俯して予が禱りを聴き、我が求めを垂允せんことを」と。鐸、其の言を聴き、主が意有るを知り、遂に女が志を以て父に諭す。父もとより熱心の教友にして、唯唯として命に従ひ、異言有る無し。モニカこれを聞きて樂ぶこと甚だしく、髪を斷ちて身を獻ず。一世貞修し、終生善を行なふ。



「口語譯」兄妹の名聲が同じ。

ヴィレラは、イエズス會の神父であつた。堺のまちに宣教に來たばかりの時、短い白衣を身に着け、手に受難像を持ち、通りに沿つて宣教した。まちの人はその目新しい様を見て、目新らしい教へを聞き、蜂のやうに群がつて來た。宣教を終へると、ある人がヴィレラの前に來て、この教道に這入りたいと申し出て、神父（ヴィレラ）を家に招いた。神父（ヴィレラ）は彼の家に行くと、厚いもてなしを受けた。彼はキリスト教に入信し、父母及び息子・娘そろつて洗禮を受けたのである。父の名はサンツィオ、母の名はマリア、子の名はヴィツェンツィオ、むすめの名はモニカである。皆な積極的に戒律を守り、贖罪に精進したが、中でもヴィツェンツィオとモニカとは更に進境著しかった。それを説明するなら、ヴィツェンツィオは十四歳で、徳を磨き善を行なふこと人々から抜きん出てをり、勤勉に懺悔を行なひ、頻繁に聖體を拜領したので、それからは聖寵が日を逐つて厚くなり、超俗の修練が日を逐つて密になつた。殉教は天主がことに寵愛する事だと知つたので、常に苦行して私慾を克服し、殉教させてくださるといふ大恩を天主が賜はることを願つた。

ある日、神父（ヴィレラ）が彼に問うた：「お前はどれほどイエスを愛しんでゐるか」と。ヴィツェンツィオは言つた：「眞摯に愛しんでゐます」と。神父は言つた：「愛しみは、言葉では分らない。行なひで分かるものだ。お前はどうかやつてお前の眞摯な愛しみを證明するのか」と。ヴィツェンツィオは言つた：「命を捨てます」と。神父は言つた：「わが主イエスはお前の靈魂を救ふために、數知れぬ苦難を受けた。お前はその萬分の一を受けられるか」と。ヴィツェンツィオは言つた：「萬の苦を受けても私は逃げません」と。神父は言つた「もし一人の他教の人が、お

前に「耶蘇に背くか生命を捨てるか選べ」と問うたならば、お前はどんな言葉で答へるか」と。ヴィツェンツィオは言つた：「私は教徒です。死ぬまで變はりません。粉骨碎身の目に遭ふとしても望む所です」と言ひます」と。このやうに言行を見ればヴィツェンツィオの素志が分かる。

彼の妹の方は、兄の優れた手本にならひ、その後ろについて行つた。天主を愛しみ苦行に全力を盡くした。モニカは父母がすでに婚約を結んだと知り、とても憂鬱になり、まっすぐ神父の前に行き、泣いて自分の氣持ちを述べて言つた：「私は洗禮の大恩を蒙つてから、すでに三年です。貞操を守る氣持ちは常に心中に往き來して離れることができません。いかにせん父母は私に告げずに疾うに婚約をしてしまひました。戒律にたがふ上に私の願ひでもありません。だから神父にお願ひします。私が嫁がずに濟むやう私の代りに父に求めて下さい。限らない苦しみを受けても、構ひません」と。神父はその言葉を聴き、すぐに言つた：「お前の志は良いなあ。私は大いに賞賛せう。しかし貞操を守ることが、影響が大きい。貴いことであるのは勿論言ふまでもないが、危ふい點も幾つもある。しかもこの事は日本で聞いたことも無い未曾有のことである。もしお前がこれを實行したら、お前の親類縁者はきつと初めてのこととして、必ず阻止せうとするだらう。これは誠に大きな事であり、誠に難事である。お前は何度もよく考へるべきだ。輕率に行動してはいけない」と。モニカは答へた：「つつしんでお教へを承り、心によく留めおきます。しかし天主には爲し得ない事はありません。天主から私にこの志を賜はつた以上は、天主は必ず私にこの事を成就させて下さる筈です。私は今、ひたすら天主の大能を頼みとし、誠意を以て天佑を求め、勤勉に靈的修行をし、ひたすら靈的功德に務めてゐます。毎週三度大い

に斷食し、一滴の水も口にしません。毎日數時間を決めて、天主の受難について黙想します。それによって事が成就する時が来て、望みを最後になかへるためなのです。天主様、どうか私の祈りをお聴き入れ下さり、私の求めを承諾して下さい」と。神父はその言葉を聴き、天主の思召しがあると知り、娘の志を父親に告げた。父親はもともと熱心な教徒であり、素直に命に従ひ、異議を挿まなかった。モニカはそれを聞いてとても喜び、髪を切り落として身を獻げた。一生涯貞淑に修行し、終生善を行なった。

# 〔釋詞〕

〔惟來辣〕 崑曲字音は「[fi lai la?]」。本稿ではヴィレーラとする。著名なイエズス會宣教師。

〔司鐸〕 崑曲字音「[sɿ do?]」。「sacerdos」の宛て字、日本譯司祭。古時漢土では鐸（大鈴）を以て政教を宣布した。司鐸は鐸化を司るといふ字義にも合はせてある。クラッセ原書は宣教師に *pater*（父・神父・葡語 *pater*）の稱を廣く用ゐ、漢譯語書は司鐸の稱を廣く用ゐる。その差は何かと言へば、司鐸の稱が儒教的感覺に合ったのだらう。

〔撒蓋〕 クラッセ原書は「Sacay」。崑曲「[sa? kai]」。すなはち堺。

〔苦像〕 クラッセ原書は「crucifix」、受難像を伴ふ十字架。

〔延街〕 延は誤り、沿が正しい。書中他の箇所にも見える。兩字の古音には開口合口の違ひがあるが、崑曲の韻書「中州全韻」「韻學驪珠」などでは同音である。

〔父名撒爵〕 「名」は「しを名とす」と訓讀すべきもので、名詞の動詞用法である。この用法は現在では「姓」の字に於いて最も常用であり、現代漢語教科書の開課第一にまで往々採用されるが、

もともと古典風の言ひ方である。しかし「名とす」では硬いので、本稿では「名のる」と訓じた。

〔其父母子女〕 文字通りならばヴィレーラを家に招いた人の父母及び子女、すなはち併せて三代といふことになるが、日本西教史を見れば招いた本人がすなはち父サンツィオであると分かる。

〔撒爵〕 崑曲「[sa? tsio?]」。クラッセ原書頁二一九の「Sancie」頁二七一の「Sanchez」。本稿ではサンツィオとしておく。

〔味増爵〕 崑曲「[fi tsen tsio?]」。クラッセ原書では「Vincent」。本稿ではヴィンセントとしておく。フロイス「日本史」第三十五章などに見える。もとの和名は日比屋了荷である。

〔莫尼加〕 崑曲「[mo? ni tsia]」。但し「加」は廣州・上海の土音で「[ka]」、蘇州の土音で「[kɿ]」。クラッセ原書は「Monique」。本稿ではモニカとする。フロイス上掲書第五十九・七十四章などに見える。史實では兄妹でなく姉弟であり、その父は日比屋了慶、洗禮名ディオゴ。母はイネス。日比屋一族については松田毅一「近世初期日本關係南蠻史料の研究」頁七五二―七五六参照。兄妹の父を撒爵とするのは、別の河内の信徒・三箇サンチョ（Sancho）と混同したものだらう。三箇サンチョの妻はルチア、息はマンシエ。三箇サンチョについてはフロイス上掲書第三十八・五十九・七十九章及び松田上掲書頁六四五―六七五参照。

〔瑪利亞〕 崑曲「[ma li ia]」。クラッセ原書「Marie」。本稿ではマリアとしておく。姓氏行實不明。

〔避罪立功〕 立功は天主に對して成績を顯はすこと。たとへば教要序論の「人の世に在るはもと立功のためなり」の條に曰く・「兵馬の戰陣の中に在るが如く、當に其の勇力を發して戰勝し、天に升る功勞を立つべし」と。また聖教要經に「贖罪の三功」を「祈禱・齋素・施濟」とする。この三功などによって原罪を滅ぼすの



が「避罪立功」の内容である。

〔告解〕〔聖體〕 日本のカトリックでも使はれる名稱。取譬訓蒙の巻下「聖事の總意を論ず」の條に曰く：「問ふ、聖事に幾件有るか。答ふ、七件有り。……三に聖體を以て、其の神命を養ふを得。四に告解を以て、其の罪病を治むるを得。」<sup>(24)</sup>

〔因知〕「因」は古文では「そこで」くらゐの意味だが、本書では常に「くによつて」といふ理由・原因を表はす前置詞として用ゐられる。俗な用法である。

〔已爲出字〕〔早爲許字〕「出字」「許字」を訓讀すれば「出だし字」「許し字」となる。「爲」は副詞の後ろに附屬するだけの役割となつてをり、所謂古文に較べて軽い用法である。この種の「爲」は元々「なす」なのか「ため」なのか、人により理解が異なるやうだが、基本的に「なす」と考へるべきだらう。

〔領洗宏恩〕 洗禮を受けたこと。「蒙」も受けることで重なつてゐるので、本來は「聖洗の宏恩」などとすべき處だが、「領洗」が慣用的名稱として使はれてゐる。たとへば取譬訓蒙下巻「領洗の聖事を論ず」の條に曰く：「問ふ、領洗は何と爲す。答ふ、領洗は乃ち聖洗の禮、諸恩の門なり」と。<sup>(25)</sup>

〔神父〕 所謂パードレ（父）のこと。「神」は超凡の・靈的のといふ形容詞であつて天主のことではない。ちなみにクラッセ原書はこの箇所には神父といふ言葉は無い。

〔賜吾成之〕「賜」は使役用法と言ふべきもの。史記・蕭相國世家：「蕭何をして第一ならしめ、劍履を帯びて殿に上り、朝に入るに趨らざるを賜ふ。」<sup>(26)</sup> キリスト教ではこれが動作以外にも頻用される。たとへば天神會課・聖號經解：「天主に求む、我の能く善言を講ずるを賜はらんことを」「天主に求む、我の善事を行なふを愛するを賜はらんことを」<sup>(27)</sup>

〔主日〕 安息日。日本のカトリックでも使はれる。教要序論の「十誡條目」三に曰く「毎七日の内に特り一日を定め、名づけて主日と爲す。」<sup>(28)</sup>

〔毎主日〕「日曜ごと」すなはち毎週。現在も南方の習慣で「毎禮拜」すなはち「日曜ごと」といふ言葉を毎週の意味に用ゐる。

〔大齋三次、滴水不沾〕 クラッセ原書に「週に三日間飲まず食はず」とあるのを譯したもの。カトリックに大齋の規定が有るが、ここは規定を念頭に書かれたわけではない。

# 【注】

(1) 鐘鳴旦「徐家匯藏書樓明清天主教文獻」第五冊「江南育嬰堂記」第二四八七至二六二二頁。

(2) 同第二五九一頁曰く：「不曰育嬰堂，而曰慈母堂」（育嬰堂と曰はずして慈母堂と曰ふ）

(3) 下冊第二九六頁。

(4) 「馬相伯先生年譜」第二七一頁附録。

(5) 注(1)所掲書第五冊第二四二九至二四三六頁。

(6) 「江南傳教史」下冊第三六三頁の表に見える。

(7) 下冊第二八四頁。

(8) 土山灣印書館發行。

(9) 「中國天主教史人物傳」下冊第二九三頁、「江南傳教史」下冊第二九八頁、「馬相伯先生年譜」第一一〇頁にもとづく。

(10) 頁二五八至二六〇。

(11) 頁九五四至九六二。

(12) 原字は馬と念とに従ふ。コンピューターに無いので、しばらく驗に作る。

(13) 原文：「人性之無分於善不善也，猶水之無分於東西也。」

(14) 原文：「元祖違命食菓，叛逆天主，天主怒，逐出地堂。」

(15) 原文：「其不克悔改自新，猶復釘上帝子於十字架而顯辱之。」

(16) 原文：「蒙以養正，聖功也。」

(17) 原文：「矇昧之時，先自養教正當了，到那開發時，便有作聖之

功。」

(18) 原文：「もと簡體字」「華人入倭自徐福始，其遺民年久繁衍，遂散布于通國。」

(19) 原文：「澤无水，困。君子以致命遂志。」

(20) 原文「人在世原爲立功」條：「如兵馬在戰陣中，當發其勇力戰勝，立升天功勞。」

(21) 原文：「問：聖事有幾件。答：有七件。……三以聖體，得養其神命。四以告解，得治其罪病。」

(22) 原文「論領洗聖事」條：「問：領洗爲何。答：領洗乃聖洗之禮，諸恩之門。」

(23) 原文：「令蕭何第一，賜帶劍履上殿，入朝不趨。」

(24) 原文：「求天主賜我能講善言」又：「求天主賜我愛行善事。」

(25) 原文：「每七日內，特定一日，名爲主日。」

#### 【引用書目】

モリソン漢譯「新遺詔書」：「幕末邦譯聖書集成」第十三至十五所收、ゆまに書房西曆一九九九年。

柴田篤「明清期天主教漢籍流入の一形態」：「幕末明治期における明清天主教關係漢籍の流入とその影響に關する基礎的研究」所收。西曆一九九三年發行。

大政官譯「日本西教史」：大正十年洛陽堂刊本。

ピリオン原著・松崎實考註「切支丹鮮血遺書」：大正十五年改造社刊本。

クラッサ Crasset 「Histoire de l'église du Japon」：西曆一七一五年 Chez Francois Montalant 刊本。

フロイス「日本史」：東洋文庫所收、平凡社昭和四十八年印刷。

パジェス「日本切支丹宗門史」：岩波文庫所收、岩波書店昭和三十五年印刷。

パジェス著、木村太郎譯、松崎實校註「日本廿六聖人殉教記」：岩波書店昭和六年刊。

伊納爵「聖教要經」：康熙五十三年（西曆一七一四）全能堂刊本。

南懷仁「教要序論」：慈母堂西曆一八六七年刊本。

潘國光「天神會課」：慈母堂西曆一八六一年刊本。

晁德莅「取譬訓蒙」：慈母堂西曆一八七〇年刊本。

檢定教科書「世界の歴史」：山川出版社昭和五十七年刊。

魏源「海國圖志」：岳麓書社西曆一九九八年簡字排印本。

佚名譯「新約全書」：美華書館同治三年（西曆一八六四年）排印本。

范善臻「中州全韻」：寫本、舊孔德學校藏、現北京・首都圖書館藏。

沈秉麟「韻學彙珠」：光緒十八（西曆一八九二）年、顧文善齋刊本。

松田毅一「近世初期日本關係南蠻史料の研究」：風間書房昭和五十六年刊。

姊崎正治「切支丹傳道の興廢」：國書刊行會昭和五十一年刊。

片岡彌吉「長崎のキリシタン」：聖母文庫所收、聖母の騎士社西曆一九八九年版。

徐宗澤「明清間耶穌會士譯著提要」：「民國叢書」第一編所收、上海書店西曆一九八九年影印。

鐘鳴旦編「徐家匯藏書樓明清天主教文獻」：西曆一九九六年輔仁大學神學院發行。

CDR「徐家匯藏書樓明清天主教文獻」：西曆二〇〇〇年臺灣中央研究院傳思年圖書館製作。

杉井六郎「日本宗教自由論」、「日本西教史」とその背景」

同志社大學文化學會「文化學年報」第三十三號第一七四至一九九頁所載、西曆一九八四年三月。

史式徵「江南傳教史」：上海譯文出版社西曆一九八三年刊。

顧裕祿「上海天主教出版概況」：「出版史料」第十號第三〇至三四頁所載、學林出版社西曆一九八七年刊。

莊素原「土山灣印書館瑣記」：「出版史料」第十號第三五至三六頁所載、學林出版社西曆一九八七年刊。

張若谷「馬相伯先生年譜」：「近代中國史料叢刊」六七—六六四。文海出版社西曆一九七一年刊。

幸田成友「日本西教史について」：「幸田成友著作集」第四卷第四三二至四三六頁所收、昭和四十七年中央公論社刊。